

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「タイス」に於ける精神的メカニズムと自由の意識
Author(s)	小住, 毅志
Citation	フランス文学, 10・11 : 60 - 67
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040900">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040900</a>
Right	
Relation	



# 「タイス」に於ける精神的メカニズムと自由の意識

小 住 毅 志

(1)

人間の生活には認識と行動の契機があり、文学者は生活意識を明確にして、生活の幸福感をもたらす。文学は観念や美の遊戯ではない。作家には認識の作家と求道の作家があり、各種各様に、文学世界を芸術意識で以って創造する。求道は認識を出発点とし、この両者の差異は各種各様の位相を以って創造世界に投影された自我の様相にある。

作者、アナトール・フランス (Anatole France) は自己の文学者としての立場を「人間性を認識し、人間性を愛し、人間性に奉仕すること」《connaître, aimer et servir l'humanité》と説明しているが、作品「タイス」(Thaïs) に於ては、この認識と求道との関連は微妙な様相を呈している。アナトール・フランスは、エジプト伝説と自己の人生経験を素材として、素材の虚構化、単純化による精神化作用を及ぼして、独特の生活意識を創造世界に導入している。

ジャン・ルヴァイヤン (Jean Levaillant) もこの作家の真摯な点を指摘して次のように述べている。

「タイスとパフニユスとの葛藤は伝説を物語るところのものではなくて、作者アナトール・フランスの自己との対話である」

《Le duel Thaïs—Paphnuce n'est pas celui qui relate la légende, mais le dialogue de France avec lui-même.》<sup>1)</sup>

このことは、作品成立時期にカイヤヴェ夫人 (Mme de Caillavet) との恋愛沙汰を惹き起こしていた作者自身の問題であったと同時に、文学者として作者が作品の中で展開した文学世界の問題でもある。この論文に於ては、作者の日常性から一応切り離された精神化された生活意識の場としての後者のみを研究対象とする。

一般的に、アナトール・フランスは<懷疑論的エピキュリアン>として扱われ、「タイス」は哲学小説として扱われている。

また、この作品を解明する場合に、一般的に、霊と肉、理性と心情、本能と道徳との葛藤の相に於て把握される。そして、そこからお定まりの<善>と<美>に根源を持つ人間理想像が常套的に導き出されている。

作品の創造世界には、当然、作者の人生、人間、社会に対する独自の認識が内在している。この認識の独自性の背後に於て作用するものとして、前述のような精神の葛藤の根源に作者、アナトール・フランスが特異な自由の意識を働かせていることを突き止め、これを解明しておく。

(2)

哲学小説とされるこの作品には種々の懐疑論的言辞が入り混り、作者自身が懐疑論者であることを彼の文学的自叙伝「文学生活」(Vie littéraire) に於て知ることが出来る。

「人間に於ては一切が神秘であり、私達は人間でないものについては何も知ることが出来ない」

«Tout est mystère dans l'homme et nous pouvons rien connaître de ce qui n'est pas l'homme.»<sup>2)</sup>

このような認識方法は判断中止を要求しがちであり、問題の明確な回答の呈示を避けがちである。また、このことが読者に作品を種々に把握し、読者のイデオロギーの枠に作品を種々に繰り入れることを許すことにもなる。

この諷刺的な物語から、読者は、各々、情念の強大さや、宗教に対する嘲笑や、霊肉の調和の必要性を汲み取り、理想的人間像を想い浮べることになる。

ともあれ、この作品に於ては、娼婦から聖化していくタイスと修道士から墮落していくパフニユスとを軸とする霊・肉の葛藤の様相が呈示されている。

パフニユスは貴族の出身で二十才までは放蕩生活をしていたが、突如改心して修道士となり、禁欲と苦行と富の軽視によってキリスト教的真理に到達しようとする。彼は自己の在俗時代に知ったタイスを教化することを思い立つが、タイスは教化の対象であると同時に肉体の美の所有者であり、パフニユスの心中には、この美の誘発する肉欲が無意識の裡に芽生える。この美と肉欲はイマージュと快感を伴って自律的に拡大化していく。

この美の非道徳性と自律性を作中人物ニシアス (Nicias) は次のように述べている。

「美は世界で最も強力なものだ。もし、我々が美を所有するために作られているのなら、我々は殆ど造物主や悟性やアイオーンやその他哲学者の夢想に対する考慮は払わないだろう」

«... la beauté est ce qu'il y a de plus puissant au monde et, si nous étions faits pour la posséder toujours, nous nous soucierions aussi peu que possible du démiurge, du logos, des éons et de toutes les autres rêveries des philosophes.»<sup>3)</sup>

このような自己の心中の変化に当惑したパフニユスは、必死に自己弁明を繰り返し、自己の行為の正当性を確認しようとする。

しかし、パフニユスが「...この女と罪を犯すことは他のどの女と罪を犯すよりも忌わしいことである」«...pécher avec cette femme, c'était pécher plus détestablement qu'avec toute autre»<sup>4)</sup> と思う時、彼の心中に於ては、宗教心を突き破って肉欲と嫉妬が跳梁している。

更に、パフニユスが「おお、タイス、私はお前を愛している！自分の命よりも自分自身よりもお前を愛している。お前のためにこそ、私は名残り惜しい沙漠を去ったのだ」«Je t'aime, ô Thaïs! Je t'aime plus que ma vie et plus que moi-même. Pour toi, j'ai quitté mon désert regrettable;»<sup>5)</sup> と語りかける時、彼の愛の強さを呈示していると同時に、美に駆られた余りの人格の喪失を暴露している。即ち、美と愛との素晴らしい結婚の名目の下

に、神の愛としての弁明のオブラートに包まれた人格の喪失が控えている。

タイスを教化する目的を持っていたパフニユスが、肉欲の囚となることは、意志と行為との矛盾撞着をきたし、客観的には、彼は<俗に神の病と呼ばれる癲癇> (l'épilepsie, nommée vulgairement mal divin) 病患者として扱われることになる。

遂に、パフニユスの心中に於ては、肉欲が宗教心を完全に打ち負かし、彼は次のように絶叫する。

「...あの女以外に何かこの世に存在すると思ひこむなんて、何という愚かなことだ！お、お、狂気の沙汰だ。私は神を、私の魂の救いを、永遠の生命について考えてきた、タイスを見た時、そうしたものが何らかの役に立つかのように」

«...Fou d'avoir cru qu'il y avait au monde autre chose qu'elle! O démence! J'ai songé à Dieu, au salut de mon âme, à la vie éternelle, comme si tout cela comptait pour quelque chose quand on a vu Thaïs.»<sup>6)</sup>

他方、タイスは貧民の出身で、物欲と快樂愛好の面を持っているが、奴隷のアーメースの敬虔な心に触れる。しかし、彼女は、最も惨たらしい苦痛という代価を払わない限り、この世で善人たることは不可能であるという考えを持つに到る。彼女は自己の肉体の美を利用して舞姫となり、富と名声を築くが、安易に自分の体を他人に任せてしまう。

このことは、自己を墮落させると同時に他人を墮落させる面を持ち、これがパフニユスの宗教心を介入させることになる。タイスはロリウスに身を任せた時ロリウスに対する愛の意識に目覚めるが、これは肉体で知った愛であって、肉体的愛以上ものに昇華せず、直ぐロリウスに飽きてしまう。

タイスはロリウスを「想像力の生み出す総ゆる狂熱と無邪気さの生み出す総ゆる心のときめき」«...toutes les fureurs de l'imagination et toutes les surprises de l'innocence»<sup>7)</sup>を以って愛した。しかし、豊かなイマージュと快感に支えられて心情が自由に昂揚し乍らも、それが人格の中で真に精神的に昇華せず、その昂揚は持続せず色褪せたものに見えて来だし、結局は、自分がもう愛していない男と暮すよりも、いっそのこと、到底好きになれそうもない男と暮した方が気楽であろうという気持になる。

この悪循環を救済するために、パフニユスはタイスを修道院に入れ、彼女は<信仰> (la Foi), <恐懼> (la Crainte), <愛> (l'Amour) の権化となり、一切の邪念を断ち、ひたすら宗教道に励み、恩寵を希求する。

これらの両者を軸とする霊・肉の葛藤から人生の種々の面が抽出され得るが、愛の問題に関しては、タイスが入信する直前に述べた次の言葉は注目に価する。

「あっちへ行って下さい。私は霊と肉とで愛して貰いたいです」

«Va-t'en! Je veux qu'on m'aime de corps et d'âme.»<sup>8)</sup>

タイスは自己の人生の指針を宗教に求めたのだが、霊と肉とによる愛をも希求している。このことは、霊的な愛と肉体的な愛の両方の必要性を認めていることになる。即ち、この作品は霊的な愛だけを認めて、肉体的な愛を否定しているのではない。人生に於ける

この両者の愛の存在を認め、この両者のあり方を問題としている面が出て来る。

また、これらの両者の愛を比較してみると、次のようなことが言える。

パフニユスの愛は、神の愛を名目にし乍らも、禁欲と苦行と富の軽視という閉鎖的な生活の中から突如肉体の美の魅力に捉われた、肉欲に陥った愛である。タイスの愛は、実人生の多面性に対する認識を持ち乍らも、霊と肉との両者の調和の必要性を覚えた愛である。この両者の愛の志向の逆行性の中に、人生に於ける霊と肉との矛盾撞着の解決の糸口を作者は暗示している。一切を断って、信仰の中にのみ生きてきたパフニユスが、現実生活を営む人間社会の中に投げ込まれ、肉体の美に直面した時、それまでのパフニユスの信仰生活の中には肉体の美という項目はなく、パフニユスは事態に当惑し、自分が肉欲の囚となっていくことをどうすることも出来ない。情欲と放縦に従って生き、快樂と肉体の美を満喫しながらも、奴隷のアーメースの純朴な信仰心をその犠牲の大きさ故に恐れたタイスは余りにも実人生を知り過ぎており、パフニユスの説得を機会に、人生に於ける霊と肉との両者による愛の必要性を悟り、実人生の中から信仰生活を位置付けることが出来る。

即ち、作者は人間の永遠性の形式の探究の過程に於て、相対主義思想と懐疑主義思想を導入している。

精神的美と肉体的美との相対性、原理的人間と日常的人間との相対性、これらの相対性の中から作者は真に文学的な理想像を垣間見させようと試みている。

作者は、パフニユスとタイスとの呈示によって、原理的人間をも日常的人間をも懐疑する。禁欲と苦行と富の軽視との原理の中に身を埋めることも、放縦と快樂の日常の中に身を埋めることも、懐疑の対象としている。

殊に、「神は統一である。なぜなら、神は唯一の真理であるからです。この世が多種多様であるのは、それが過誤であるからです」《—Dieu est l'unité, car il est la vérité qui est une. Le monde est divers parce qu'il est l'erreur.》<sup>9)</sup>と信奉していたパフニユスが人生に於て失敗し、狂人として扱われ、タイスの屍を貪る<吸血鬼>(vampire)と罵られるに到ったことには重大な意義が込められている。

作者自身この作品を次のように定義付けている。

「神の正義が人間の正義でないことを示すために、パフニユスがタイスの魂を救おうとして自分の魂を失うことを私は欲した」

《J'ai voulu que Paphnuce perdît son âme en voulant sauver celle de Thaïs pour marquer que la justice divine n'est pas la justice humaine...》<sup>10)</sup>

即ち、パフニユスは神の正義と人間の正義との矛盾撞着に立たされた犠牲者として、作者によって設定されている。

神の正義は必ずしも人間の正義ではなく、神の掟は必ずしも人間の掟ではあり得ない。

宗教的世界観の中にのみ自己の生活の幸福感を覚えることの出来る人間の場合は、この矛盾が殆ど隠蔽されてしまうが、パフニユスの言動は、神が唯一の真理である統一世界が

人生の多面性に必ずしも適合しないことを示している。宗教に求道する人間の裏面には種々の生活意識が入り込む余地がある。この余地を残すまいとして、宗教人は禁欲と苦行と富の軽視に励む。然るに、宗教と人間性 (humanité) は本質的に同一ではない。宗教とは、人間性の理想への志向を神の救いに向けた人間の認識世界であるからだ。従って、問題は、宗教と人間性を合致させるか乖離させるかの相違にある。

アナトール・フランスは、明らかに、この両者の乖離の面にも注目しているのであり、それは具体的なキリスト教攻撃に結び付く。

「不吉な幻想に立脚したあの教会というものは十八世紀の間に、科学と美を葬ってしまい、幾多の血潮を流させた。教会はそれを受け容れた人々の才能を曇らせた。キリスト教は原始的野蛮への復帰である。即ち、贖罪の観念のことである」

« Cette église, fondée sur des illusions funestes, a, pendant dix-huit siècles, enseveli la science et la beauté et fait couler des torrents de sang. Elle a obscurci le génie des peuples qui l'ont adoptée.

Le christianisme est un retour à la barbarie la plus primitive: l'idée d'expiation... »<sup>11)</sup>  
 このことは、神が唯一の真理であるキリスト教世界観、率いては、宗教世界観が人生の多面性に堪え切れず、必ずしも人間性の進歩ばかりに寄与するものではないことを意味している。

ジャン・ルヴァイヤンもアナトール・フランスのこの面に注目し、神の統一世界に対して次のように述べている。

「統一、それは不寛容である。それは、精神、若しくは、心から生じたる超自然的なもの、の抽象化の名に於ける、人生の微妙さに対する盲目である」

« : l'unité, c'est l'intolérance, c'est, au nom d'une abstraction de l'esprit ou d'un surnaturel né du cœur, l'aveuglement devant les ambiguïtés de la vie »<sup>12)</sup>

人生は多面性を有し、神による意識の統一は人生に対する不寛容の面を生ぜしめる。

この作品に於て、作者は人間の幸福の幻影を呈示し、懐疑思想を駆使して、人生の虚偽を突き立て、人間存在の底にある人生の真理を潜ませているが、この作家によれば、人生の真理が単一なものであれば、パニフュスのように人生に狂いが生じることにもなりかねないことになる。

パニフュスの失敗は、人間性を宗教に完璧に合致させ得なかったというよりも、人生を宗教の一面からのみ見つめこの面と他の種々の面との調和に成功しなかったことにある。

しかも、人間は理性のみならず感情にも動かされ乍ら、思想と美に志向し、官能的快樂に耽り、幸福を追求する意識者として呈示されている。

この人生の諸相、霊と肉との矛盾撞着を救うために、アナトール・フランスは独自の自由の意識を呈示している。

先ず、彼はキリスト教の偏見を打ち破るために無常観を用意する。

即ち、「...この世の一切は蜃気楼であり流砂である。常に神の裡にのみ恒久性がある」

《Tout dans ce monde est mirage et sable mouvant. En Dieu seul est la stabilité.》<sup>13)</sup> から「…如何なるものも、それ自体としては、名誉不名誉、正不正、快不快、正邪善悪の孰れでもない。恰も、塩が料理に風味を与えるように、事物に諸々の性質を与えるのは人間の見解です」《Rien n'est en soi honnête ni honteux, juste ni injuste, agréable ni pénible, bon ni mauvais. C'est l'opinion qui donne les qualités aux choses comme le sel donne la saveur aux mets.》<sup>14)</sup> にまで到る。このことは、神の恩寵によって統一された世界観の枠を打ち破り、事象自体には善悪、美醜、意味はないのであって、これらを付与するのは人間の自由の意識である点を指摘している。

しかし、無常観自体に於ける自由の意識は、何ら問題を解決することにはならない。

作中人物ユークリート (Eucrite) は自己の立場を次のように説明している。

「奴隷たちや皇帝がたの甥御たちの間の数人は今もなお自分自身を制御することを、自由に生きることを、事象の超脱の裡に無限の至福を味わうことを、知っている」

《Pusieurs parmi les esclaves et parmi les neveux des Césars savent encore régner sur eux-mêmes, vivre libres et goûter dans le détachement des choses une félicité sans limites.》<sup>15)</sup>

このユークリートの自由は、事象からの超脱 (le détachement des choses)、即ち、現実から逃避した観念の遊戯であり、人生の放棄に立脚した自由である。最早、自我が主体的に人生を生きていないことになり、当然のこととして、ユークリートの自由は死の帰結をもたらす。

宗教的偏見の克服のための方法的無常観を乗り越えて、アナトール・フランスは更に高次の自由の意識を呈示している。

パフニウスとタイスは、宗教理念を教化する者と教化される者であると同時に、互いに一応愛の対称となり得るような男性と女性である。しかも、彼等は官能的快樂に耽り、幸福を追求すべく生れついている。

「…私達は二人共自分達の悦楽を求め、共通の目的、即ち、幸福を、あの得難い幸福を得ようとしているのだ！」

《; nous rechercherons tous deux notre volupté et nous nous procurons une fin commune: le bonheur, l'impossible bonheur!》<sup>16)</sup>

このニシアスの言葉は、明らかに、初期のパフニウスの禁欲、苦行、富の軽視の原理とは相容れない。神の統一の中であって、一切のものを断たなければ、自己の人生を理想的なものにすることが出来ないことに対する反撥をこの作品は内含している。

### (3)

アナトール・フランスの文学には、自然で素朴なラブレール流のユマニスムが快樂主義の園の中に咲いているが、「タイス」に於けるこの反撥もこれと関連を持っている。

相対主義思想と懐疑主義思想に支えられて、人生の多面性を見つめた場合、人間には、

当然、官能的快樂と幸福追求の権利が認められ、これもユマニズムの一環と見做されてくる。

パフニユスが肉体の美に惹かれたことは神の全能に対する懷疑を含み、パフニユスが屍を食う狂人として扱われたことは肉体の美の全能に対する懷疑を含んでいる。

この両面の懷疑の間隙に、アナトール・フランスは独自の自由の意識を働かせて、独特の精神的美と理想的人間像を介在させている。

この両面の独自の調和の裡にこそ、アナトール・フランス独特のオネットム (honnête homme) が介在している。

また、このオネットムこそ、不条理の人間の原型であり、ユマニズムの権化である。

しかし、人間の経験は一つの選択であると同時に一つの喪失である。更に、人間の意識が技術的に細分化されればされる程、調和が葛藤の神話の色彩を強く帯びてくる。

ここに、アナトール・フランスのオネットムの時代的意義と時代的限界があるが、ラブレール、17世紀の作家の後継者としての役目は十分に果している。

このような評価はともかく、アナトール・フランスはパフニユスとタイスとの人生を諷刺と憐憫を以って見つめ、独自の自由の意識を駆使して、人間讃歌を詠い上げている。

タイスは一応神の恩寵によって救済されていると言うことが出来るが、タイスもパフニユスも理想的な愛の成就を見る事が出来ず、不条理な生を送ってしまったのも、この自由の意識の欠損とユマニズムの不在に外ならない。

ここに、アナトール・フランスの文学に於ける人間讃歌の基盤がある。

(了)

〔註〕

- 1) Jean Levaillant: L'évolution intellectuelle d'Anatole France, p. 224.
- 2) Anatole France: Vie littéraire, t. II, p. 70.
- 3) Anatole France: Thaïs, p. 41.
- 4) Ibid., p. 43.
- 5) Ibid., p. 90.
- 6) Ibid., p. 207.
- 7) Ibid., p. 79.
- 8) Ibid., p. 129.
- 9) Ibid., p. 200.
- 10) Anatole France: Courrier de Paris, Univers Illustré, 14-4-1894.
- 11) Anatole France: Dernières pages inédites, p. 58.
- 12) Jean Levaillant: L'évolution intellectuelle d'Anatole France, p. 826.
- 13) Anatole France: Thaïs, p. 35.
- 14) Ibid., p. 27.



- 15) Ibid., p. 107.
- 16) Ibid., p. 149.

参 考 文 献

- ① Anatole France: *Thaïs*, Calmann-Lévy.
- ② Anatole France: *Vie littéraire*, t. II.
- ③ Jacques Suffel: *Anatole France par lui-même*, Editions de seuil.
- ④ Marie-Claire Bancquart: *Anatole France polemist*, A.G. Nizet.
- ⑤ Jean Lévaillant: *L'évolution intellectuelle d'Anatole France*. Armand Colin.
- ⑥ C. Évelpidi: *Anatole France*, Editions Messein.
- ⑦ André Vandegans: *Anatole France Les années de formation*, A.G. Nizet.